

ポケットモンスター Sparkling

初雪

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

【コメディ+冒険+百合+ポケモン】

アニオタの少女ココナはシンオウリーグに挑むためコトブキシティから旅に出るのだが、出発早々ポケモン強盗と遭遇し、立ち向かうもののボコボコにされる。そこに現れたのがヒカリだった。無事に旅は始まるが、運が悪いトレーナーが集まったせいか死にかけてながら旅を続けていく。そんな感動あり漫才ありバトルありの冒険を描いた物語。

七話ぐらいから面白くなるので序盤で飽きた人は七話から見てください。

目次

第1話	新しい風は吹く!	1
第2話	バカと強盗とシンオウチャンプ	6
と202番道路	——	6
第3話	野良ハヤシガメを避けてマサゴ	13
へ!	——	13
第4話	ようやく到着!	18
第5話	ポケモン図鑑と二匹目のポケモ	24
ン	——	24
第6話	コトブキへUターン!	28
第7話	挫折の日	34
第8話	才能	43
第9話	草むらへ飛び出そう!	55

第10話 渡れストーカー! マイ登場!!

66

第11話 ココナ達、逮捕される。

73

第12話 波乱の刑務所

79

第13話 シャボンを突破せよ!

91

第1話 新しい風は吹く!

コリンク（以下くー）「くるうん!」

ココナ「どうしたのくー、今日は日曜日だよお：： オヤスミ」

くー「くるうーん!くるうーん!!」

ココナ「まだ朝だよお：：」ココナ、時計をみる。時計は夕方5時を指す。

ココナ「つてもう5時か!まあいいや、オヤスミ」

くー「くるう!くるうーん!」くーは手紙をくわえている。

ココナ「なにいこれ：：」

—T o ダテ・ココナ

シンオウリーグを指してはみないか。

君の実力はコトブキトレナーズスクールから聞いているが、

聞いたところその地涌力があればジム制覇は容易なことと予想している。

もしその気があるならマサゴタウンへ訪れてほしい。

B y ナナカマドー

説明しよう！CギアX—fiveゼロ型とはジョウト地方でおなじみだったCギアの最新型で、地上波とBSが見られたりもするすごい端末である。定価25740円（税込み）。

ココナ「母上様あああああああああああああ」

お母さん「で、どうするの」

ココナ「行きます！私、行きます！」

お母さん「急にテンション上がったわね」

ココナ「ポケモンマスターになるよ」

お母さん「ハードル高いわよ。(。Д。;)」

ココナ「いつてきm:.」

お母さん「ちよい待ち」

ココナ「何お母さん」

お母さん「パジャマじゃないの」

ココナ「あ、そうだった」

ココナ「よいしょつと」

お母さん「それにモンスターボールもバッグも持ってないし。コンビニでも行くつもり？」

ココナ「あはは」

お母さん「あははじゃないわよ」

5分後

ココナ「準備完了!いつてらっしやい」

お母さん「いつてきますでしょ」

ココナは202番道路へ向かっていた。

ココナ「ことぶきしていーにーさよならばいばーい♪わたしはこのことおーたびにでるうー♪」

くー「くるうん!」

街の住人たち「やめろー!」「キヤー」「俺のムツクルが:~」

ココナ「悲鳴!?!」

ココナは周りを見渡した。そこにいたのはサザンドラを連れた男だった

ココナ「ちよつとなにしてるのよ!」

男「ああん?」

第2話 バカと強盗とシンオウチャンプと202番道路

男「ああん？」

ココナ「ヒエツ」

男「あんだよてめえジロジロ見やがって。」

ココナ「さつきから人とかポケモンとかになしてるのよ」

男（以下強盗と表記）「あん？俺は強いポケモンを強盗しようとしてんだよ。この街は都会」

だから金持ちとかつええヤツいんだろ。」

ココナ「最低ね！クズね！」

強盗「あんだとお!？」

ココナ「あつ、そつかあーそんな欲望むき出しだからニキビだらけなんだね。なんでそんな

なブツブツブツブツきつたないのかなって思ってたんだけどそういうことだったんだあ」ココ

ナはドSモードになった。

強盗「なっ… えっ… そんな…」ナイーブな強盗に効果はバツグンだ！

強盗「てめえ… 喧嘩うってんのか？」

ココナ「ちょｗｗｗｗｗｗ喧嘩売ってんのかあだつてｗｗｗｗｗｗ厨二乙ｗｗｗｗｗｗ」

強盗「病院で後悔してろ！ サザンドラ、竜の波動！」

ココナ「くー、守る！」キュイーン

ココナ「影分身してそのまま氷のキバ！」

くー「くるうーん！」シユシユシユシユシユ ガブツ

ココナ「ふふふ、相手はドラゴンタイプ。効果はバツグンn…」

強盗「ハハハハハ。俺のサザンドラはそんなヤワじゃねえぞｗｗ」

ココナ「うそ!? 耐えてる！」

強盗「サザンドラ、ドラゴンダイブだ！」

サザンドラ「ガザアー！」ドラゴンダイブがくーに直撃した。

くー「くるう… ん…」くーはもはや戦える状態ではない。

ココナ「くー?! 大丈夫?!」

強盗「はははははは良い様だ！ もっとやれ、焼き尽くすだ！」

サザンドラ「ガザアー！」くーに命中。

ココナ「待って、くーはもう瀕死なのよ？ もう… やめて…」

強盗「俺を侮辱したからこうなるんだ。サザンドラ、とどめを刺してやれ」

サザンドラ「グオアアー！」サザンドラは竜の波動を出すかまえをした。

ココナ「やめて…… 死んじゃうよ……」

強盗「やれ」

ココナ「くー……！」

その時だった。

???「ムクホーク、インフアイト！」

ムクホーク「ホオーク!!」ドドドドドドド

サザンドラ「ザア……」サザンドラに命中。サザンドラは倒れた。

ココナ「ふえっ……？」キョトン……

強盗「なっ…… どういうことだ…… だっ、誰だ!?!」

ヒカリ「私はヒカリ。バツジ8個もないくせにそんな弱いサザンドラで強盗なんて頭クルクル

クルパーね。出ておいで、ゴウカザル。」ポムツ

強盗「えっ……？ えっ……？」

ヒカリ「ゴウカザル、あの強盗を草結びで拘束して。」

ゴウカザル「クウアー」クルツ

ヒカリ「うっし、ありがと！んじや、強盗さん、ジュンサーさんに連行される心の準備はあるわね？」ヒカリはそういつてウインクした。

街の人々「すげえ！」「かつげえ！」「あの人チャンピオンじゃね？」「ブラボー！」

ヒカリ「あくどうも〜」テレテレ

ココナ（可愛い…… じゃなくて！）

ココナ「あつ、ありがとうございました！」

ヒカリ「なんもよくあれくらい〜 あのままいったらわいやだったわね〜」

ココナ「あの、ヒカリさんですよね」

ヒカリ「うんそうよ」

ココナ「あのシンオウチャンプの？」

ヒカリ「えっ、知ってるの？ あたしも有名ね〜」

ココナ「まじですかあのヒカリさんですか!」ソンケーノマナザシ

そう。このときココナは知らなかった。

これからどんどんチャンピオンの威厳が失われていくのを見るのが日常になるなんて。

ヒカリ「そういえばあなた、ココナちゃんって人知らない？」

ココナ「私ですけど」

ヒカリ「あ、じゃあ丁度いいわ。あなた博士に招待されたわよね？」

ココナ「はい」

ヒカリ「じやついてきて！私、コウキくんのかわりに博士の助手っぽいことやってるの」

ココナ「コウキクン？」

ヒカリ「あ、私が冒険を始めた頃に出会った博士の助手よ。私と同一年の14歳で、今はカロスにいるの。」

ココナ「そうなんですか。」

ヒカリ「じゃあついできて！」

ココナ「はいっ！」

202番道路

ヒカリ「あ、タメ口でいいよーさん付けもいらさないし」

ココナ「え、でも」

ヒカリ「相手だけ敬語使われるとなんかアレなんだよね(笑) 歳も同じぐらいでしょ？」

ココナ「まあ先月13歳になったところです。」

ヒカリ「んじやいいじゃん」

ココナ「はい：．　　じゃなくてそうだね、ヒカリ。」
キヤタピーが現れた。

ココナ「あ、キヤタピーだ：．．　　ってヒカリさん？」

ヒカリ「ワタシハシンデイマス。ワタシハシンデイマス。コレハシガイデス。」ガタガ
タ

ココナ「あのお：．．」

ヒカリ「死んだふりよ死んだふり！ココナもはやく！」

ココナ「いやいや、リングマじゃないんだから。」

ヒカリ「熊より恐いわよ！リングマなんかインファイトで倒せるじゃない」

ココナ「キヤタピーなんかはたくで倒せるよ：．．」

ココナ「行きますよ。」

ヒカリ「」ガタガタガタガタ

ココナ「しやーないなあ：．　　くー、雷のキバ。」

くー「きゆるん！」ガブウ

ヒカリ「ふ、ふう：．．　　あ、ありがとう：．．」ニコツ

ココナ（可愛い）

ヒカリ「つてきやあ！ビートルよ！しかもたくさん」

ビートルの群れ、参上。

ヒカリ「うわーん、たすけてええ help me っとうわあ」ズルツ
ヒカリは足を滑らせ、木にぶつかった。

すると木から巣が落ちてきた。スピアーの群れが襲ってくる。

ココナ「ええええええええええ（。 ㇏。 ;）」

ヒカリ「#+:」:・へ・:・:。:+:+ /。+:。 (二) ↑声にならない悲鳴

そのスピアーを食べに空からムクホークの大群が。

しかもフンを落としてくる。

ココナ「なんでこんな目にいーーーー」

人はこれを地獄絵図という。

u
e

T o b e c o n t i n

第3話 野良ハヤシガメを避けてマサゴへ！

ヒカリ「ガハツゴホッ

ココナ「なんでこんな目に…」ゼーヒュー

ヒカリ「大変だったね」

ココナ「ヒ… ヒカリが… スピアーの巣なんか落とすから…」

ヒカリ「いやあ、あそこにあつたとはね。でも出物腫れ物所嫌わずって言うじゃん」

ココナ「それ意味違う」

ヒカリ「じゃあ柵からボタモチ？」

ココナ「木から落ちたのがボタモチだったらどれだけよかったか…」

ヒカリ「まあまあ、そんなこともあるって！大丈夫大丈夫！」

ココナ「は、はあ…」

ヒカリ「よっし、マサゴはもうすぐよ！」

くー「きゆる！」

ココナ「どしたの？」

くー「きゆる！くるうー！」くーは指をさした(?)

ココナ「ハヤシガメ……!!」

ヒカリ「えっ…… 誰かのポケモンなんじゃ……? こんなところに出るはず……」

ハヤシガメ「シヤメー!」

ヒカリ「ムクホーク、出ておいで」ヒカリはムクホークの入ったモンスターボールを手に

取った。しかし遅かった。

ハヤシガメ「ぐおおおおお」

ヒカリにむかってとっしんした。ヒカリは飛んでった。

ココナ「ヒカリ!!」

ハヤシガメ「ぐおおおお……」ハヤシガメはココナをにらむ。

ココナ「しっ、失礼しますたー!」スタコラサツサ

クーをボールにしまい、ココナは林へ隠れ込んだ。

ココナ「つてヒカリ!!」そこにはヒカリがいたのだ。

ヒカリ「あ、はぐれたかと思ったあ……」ヒカリは足を怪我している

ココナ「立てる?」

ヒカリ「だいじょうびタツ!」

ココナ「これかr……」足音が聞こえた。振り向くとそこにはハヤシガメが。

ハヤシガメ「ぐおおおお」

ココナ（ヒカリはけがをしてるし… やるしかないわね…）

ココナ「ハヤシガメ。こつちよ！」

ハヤシガメがココナにゆうどうされる。ココナ、こつそりハヤシガメの背後にくーを出す。

ココナ「今よ！影分身！」

くー「くるう！」

ココナ「そのまま氷のキバ！」

くー「くるうーん！」ガブツ

ハヤシガメは耐えた。

ハヤシガメ「ぐおおおお！」ハヤシガメが攻撃してくる。

ココナ「上よ！上に飛んでよけて！」

くー「くるうん」くーは高く飛んだ。

ココナ「そのまま急降下でワイルドボルト！」技マシんで覚えさせた技である。

くー「くらうううううう」チユド———ン！！

ハヤシガメ「ぐおおお。」バタツ

ココナ「やったあ!倒したよ、私!」

ヒカリ「す、すごい! 私ココナに助けられちゃった(笑)」

その時、くーが光りだした。

くー「くーん」キラキラ

ココナ「くー?」

くーはコリンクからルクシオへ進化した。

ココナ「進化... した?!」キョトン

ヒカリ「あの素早さからみると相当レベル高いからいつ進化するかと思ってたの」

ヒカリ「まさかこんな時なんてね」

ココナ「えええ!! す、すごーーい!」

ヒカリ「よし、マサゴにいk イツタア!」

ココナ「ケガしてるんだよね... どうしよう」

???「やあ、大丈夫かい?」

ココナ「だいじよばないです。」

???「どうしたのかな?」

ココナ「この子がケガしてて、立てないんですよ...」

???「わかった、じゃあとりあえずマサゴタウンのポケモンセンターでいいかな」

ココナ「えっ？」

プラターヌ「僕はプラターヌ。このリザードンに乗せて連れてくよ。」

ヒカリ「いいんですか!!」

プラターヌ「丁度マサゴに用があるんだ。じゃあ乗って」

t
i
n
u
e

T
o
b
e
c
o
n

第4話 ようやく到着!

ココナ「ヒカリが無事マサゴに行けたのはいいものの、なんで私は置き去りなのよ……」

足を怪我したヒカリは通りすがりの青年にリザードンに乗せてもらい今頃マサゴのポケモンセンターにいるのだが、ココナはおいて行かれたため徒歩なのであった。

ココナ「今日は色々酷かった……まさか1日でこんなにたくさん……」

ココナ「あれ? 誰がいる」目を向けた先には四つん這いしてる少女がいた。

ココナ「……何してるの?」

少女「ジグザグマってこんな感じなんですネ」プルプル

ココナ「(うわあ……) 痛いコだ……) そうだね。じゃあね〜」スタコラサツサ

少女「ちよ、ちよっと待っててくださいよ!」少女はハイハイしながら追ってくる。

ココナ「ちよ、その格好のまま追わないで! 怖い! 怖いから!」

少女(以下ノノカ)「私ノノカって言います!」

ココナ「聞いてないよ!」

逃げるココナ。

四つん這いで追いかけるノノカ。
他人が見たら変態である。

ココナ「たーすけーてー！　つてアレ？」ガタツ

ココナとノノカは高めの段差から落ちた。

ココナ「うわあああああああああああああ」

ノノカ「アイムフライーリング！」ドカツ

ココナ「いた…　くない…」ふわふわ

ノノカ「なんかクツションみたいです」

ココナ「これなんだr:」その正体を知ったココナの顔はまっさおであった。

ノノカ「カビゴンだー」

ココナ「あつ、あー　お世話になっておりますー　で、でわ失礼しましたー」

ココナはカビゴンから降りる。

カビゴン「ぐおおー」

カビゴンは怒っている。カビゴンは立った。

ココナ「ぎゃーーー」

ココナは逃げる。しかしカビゴンの方を振り向いた瞬間立ち止まった。

ノノカ「私のことはきにしないでー グハッ」ノノカはカビゴンから転げ落ちひるんでいる間に攻撃されそうになっている

ココナ「仕方ないわね… くー! 電磁波!!」

くー「くるうーん!」ビリリ

カビゴン「ぐおっ… ぐお?」キョトン カビゴンは麻痺した。

ココナ「影分身してワイルドボルト!」

くー「くるうーん!」ズドー

カビゴン「グツ… ぐおー…」カビゴンは倒れた。

ココナ「モンスターボール!」

ボールが三回揺れ、赤く光った。

ココナ「うっしや! ありがとうくー」

ココナ「おーい大丈夫かえー?」

ノノカ「えっ… あ… あ…」ポカーン

ココナ(?)

ノノカ「すっ、すごい! 感動しました! 私!」

ココナ「あ、ありがとう じゃ」

5分後

ココナ（もうすぐ到着だけど、なにか後ろから気配をかんじる）

ココナ「まあいつか。あ、ついた！」

ヒカリ「おーい！ココナー！」

ココナ「あ、ヒカリ！手当てしてもらったんだね！」

ヒカリ「後ろの人は知り合い？」

ココナ「え？後ろの人……？」

ノノカ「やあ」

ココナ「」

五分後 研究所にて

ヒカリ「博士ー、連れてきましたよー」

ココナ「は、はじめまして！」

ナナカマド「おかえり。やあ、私はナナカマドだ。」ムツシヤムツシヤ

ココナ「何食べてるんですか？」

ナナカマド「あんみつだが。食うか？」

ココナ「い、いえ。結構でs」

ナナカマド「いいから食べてみなさい。」

ココナ「は、はい…… いただきます つて甘っ」ゲホゲホ

ナナカマド「君には甘すぎたか。で、後ろの少女はだれだ?」

ノノカ「ノノカです」

ココナ「帰れ。」

ノノカ「帰りません!」

ココナ「ならば仕方ない」ココナはムーンボールを構えた。

ノノカ「失礼しました!」

ヒカリ「変な子ね」

ココナ「そうよ(でもヒカリに言われたくないと思う)ね。」

プラターヌ「あ、さっき君だね」

ココナ「あ!なんでここに?」

プラターヌ「あれ、言ってなかったっけ。」

ヒカリ「プラターヌさんは博士の生徒なんだって!」

プラターヌ「そうなんだ。五年前までね。ちよつと来たんだよ。」

プラターヌ「それで博士、僕はカロスへ行きます。」

ナナカマド「ふむ。あの《謎の進化》のことだろう。」

プラターヌ「はい。ミアレシテイという都市で研究所を建てます。」

ヒカリ「謎の進化？」

プラターヌ「ああ、僕が12歳のころカロスへ行つたときなんだけど、」

ココナ「12歳?!」

プラターヌ「メタグロスを連れた石マニアの人と緑色の竜と戦つたんだ。不思議な人だっ

たよ。「実験成功」と言つて空から降つてきたんだ。」

ヒカリ「空?!」

逃 プラターヌ「そう。で、ある不思議な洞窟で竜と戦つたんだけど、なかなか苦戦して。

げようとしたんだけどなかなかその竜逃がしてくれなくて。絶体絶命だつたんだけど、そのとき地面に落ちていた岩の一部が光つて、リザードンが黒いからだと青い炎を吐いて。それはもう強かった。で、まだ進化するのかと思つたんだけど、竜から逃げきつたらもどつたんだ。」

ココナ「なんですかそれ?!面白い」

T o b e c o n t i n u e

第5話 ポケモン図鑑と二匹目のポケモン

プラターヌ「それで、私はカロスへ行きます。土産は」

ナナカマド「ミアレガレットで」

プラターヌ「そう言うと思いました」

ナナカマド「じゃあ、これを持って行ってくれないか」

ナナカマドは石のようなものを手渡した。

プラターヌ「これは？」

ナナカマド「言っていた例のあれだ。今研究しているひとつだ。持っていけ。」

プラターヌ「ありがとうございます！ では、絶対実証しますね。」

ナナカマド「それで、ココナと言ったな？」

ココナ「え… あ、はい！」

ナナカマド「今日来てもらったのは渡すものがあるからだ。」

ココナ「私に… ですか？」

ナナカマド「うむ。まずはポケモン図鑑。これは目にしたポケモンを自動で説明してくれ

る機会だ。」

ココナ「すごい！」

ナナカマド「それとこれだな。好きなものを選ぶといい」

そう言つてナナカマドは三つのモンスターボールが入った籠を出した。

ナナカマド「今はある研究者のマネをして旅に出る少年少女にポケモンを配つていてな。」

君も一つ持つていくといい。」

ココナ「本当ですか!? えーととと…」

ヒカリ「ポツチャマは? 洗濯機や風呂の時節水になるわよ!」

ココナ「家庭的すぎるよ」

ヒカリ「トイレの時も便器いらずよ!」グツ

ココナ「あんたポケモンになつてことさせようとしてんの。(。D。;)」

ヒカリ「じゃあナエトルは? いつでも木を生やしてくれるから茂みでトイレ」

ココナ「だからなんてこと考えてんのよ! ていうかどんだけトイレ好きなのよ」

ヒカリ「出物腫れ物所嫌わずよ!」

ココナ「女の子が言つていいことじゃないよ!それは!」

ヒカリ「百合のお花を摘みに行くのは大切よ」

ココナ「言い方変えれば良いわけじゃないよ！」

ヒカリ「じゃあどうすればいいのよ！」

ココナ「まずトイレの話を止めよう！」

ココナ「…とまあ、漫才はここでやめて、どうしようかな」

ココナ「うーん… あっ！」

〈ココナ回想〉

ココナ「やめて… 死んじゃうよ…」

強盗「やれ」

ココナ「くーー！」

ヒカリ「ムクホーク、インファイト！」

ムクホーク「ホオーク!!」ドドドドドドド

サザンドラ「ザア…」サザンドラに命中。サザンドラは倒れた。

ココナ「ふえっ…？」キョトン…

ココナ(あの無駄にかっこよかったインファイト。ゴウカザルってインファイトおぼ

えるよね…？)

ココナ「ヒコザルで！」

ヒカリ「ヒコザル？ 水も出ないし茂みも生えないよ」

ココナ「トイレはいいの！」

ナナカマド「ヒコザルだな。よし、このボールだ。」

ココナ「ありがとうございます！ よし、じゃあ次はジムだー！」

ヒカリ「おー、懐かしいなあ… ジム！」

ココナ「ありがとうございます！」

ココナ達外へ出る。するとそこに立っていたのは…

ノノカ「おかえりなさい！どこ行く？ 喫茶店？」

ココナ「ヒコザル、鳴き声」

ココナとヒカリは耳を塞いだ。

ヒコザル「つきいいいいー！！」

不快な超音波のような音はノノカの鼓膜めがけてあがる。効果はバツグン。

ノノカ「ぬああああああああ！ スイマツセンシタ！やめて！やめ…！」

ノノカ「…つていねえ！」

第6話 コトブキへUターン!

一晩ポケモンセンターで休んだココナ達。ジム挑戦のためコトブキへリターン

ココナ「Uターンかあ…。 テンションさがりますなあ」

ヒカリ「まあまあ、昨日みたいなことにはならないでしょ。」

ココナ「そういえばヒカリはついてくるの?」

ヒカリ「うん、面白そうだしね。」

ココナ「ん? あ、あれは…。」

ヒカリ「!?!」

ココナ「またカビゴン?!」

カビゴン「があああああ」ドスン

ヒカリ「なんでこんなところにカビゴンが…。 この前のハヤシガメといい…。」

ヒカリ「まあいいわ。出ておいで、エンペルト!」

エンペルト「ペるとあ!」

ヒカリ「よしメタルクロ!」

エンペルト「ペルア!」

カビゴン「ごおーん」カビゴンはとっしんで打ち返してきた。

ヒカリ「エンペルト！大丈夫!？」

ココナ「あちゃばー、こりやまずいなあ…。」

ココナ「よし、くー、影分身！」

くー「くるうーん！」パパパパパパパパパパ

ココナ「ワイルドボルト！」

くー「くるうーん！」ドガ——

カビゴン「ぐるふう…。」カビゴンは身を守った。

ヒカリ「エンペルト、ハイドロポンプ！」

カビゴン「げふう」身を守った。

カビゴン「があー！」カビゴンのギガインパクト！

ココナ「くー、よけて！」しかし遅かった。

くー「くるう…。」バタッ

くー、エンペルトは倒れた。

ココナ「くー、戻って！」

ヒカリ「エンペルト、休んで。逃げ…。たいけど道はないし…。」

ココナ「詰んだ＼（^o^）／」

ヒカリ「まだよ。ムクホーク!」

ムクホーク「ホ————ク!」

カビゴン「がう」のしかかり

ムクホーク「ホオ!!」ガッ

ココナ「私にはまだいるんだった。ヒコザル!」

ヒコザル「ひっこおおお」

ココナ「カビゴンに鳴き声!」

ヒコザル「うつきやあああ」

ヒカリ「攻撃を下げてくれるのね…。でも、カビゴンはそれだけじゃ…。」

ココナ「ヒコザル、ニトロチャージ連発よ!」

ヒカリ「ニトロチャージ…。?」

ココナ「技マシンにきまつてるでしょ!」

ヒカリ「よし、ムクホーク、電光石火!」

カビゴン「ぐおお」効いていない

ヒカリ「そこからインフアイト!」

ムクホーク「ホオオオオ!」

カビゴン「ぐおお」

カビゴンのギガインパクト。

ムクホーク「ほおおっ」

ヒカリ「今よココナ！」

ココナ「わかった！ ヒコザル、ひのこ！」

ヒコザル「ひっこおおお！」

カビゴン「ぐおっ」

ココナ「もともつとひのこ！」

ヒコザル「ひっこおおお！」

ニトロチャージを積んだヒコザルはとても素早い。

さらに相手はギガインパクトを打った直後のもともと遅いカビゴン。

スピードごり押しである。

ココナ「そろそろね。」

カビゴン「ぐおっ!!」カビゴンはやけどを負った。

ココナ「ヒカリ！」

ヒカリ「はいよ！ インフアイト！」

ムクホーク「ホオオオオオオ！」

カビゴン「ぐおお...」

ココナ「タイマーボール!」ココナはボールをカビゴンに投げた。
カビゴン「ぐお?」カボン

トウル トウル トウル キラッ

ココナ「やったああああ! 捕まえた!」

ヒカリ「まさかタイマーボールを…」

ココナ「備えあれば憂いなしよ」

ヒカリ「そして出物腫れ物所嫌わz」

ココナ「それは違う」

数分後

ココナ「ついたー! クロガネに帰ったあ!」

ヒカリ「色々あったねー」

ココナ「じゃあ早速」

ヒカリ「ジム?」

ココナ「いや、け〇おん。」

ヒカリ「ズコー」

ココナ「だって街でしかCギアの電波届かないし」

ヒカリ「だからって」

ココナ「今日は録画したけい〇んを見ないといけないの！」

Cギア起動

録画再生

ココナ「ああ〜 あずにゃん萌え〜」

ココナ「かわ唯」

ココナ「唯とあずにゃんはよ結婚しろー」ブツブツ

ヒカリ（違う世界に逝っちゃってる…）

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e

第7話 挫折の日

ヒカリ「ほら、行くよ」

ココナ「へいへい・・・」

ココナ「すいませーん、ジム戦したいんですが・・・」

ココナ「もしもーしいらっしゃいますかー」

ヒカリ「居ない・・・」

ココナ「居ないなら仕方ない。桜Trickを観」

ヒカリ「ません。」

ココナ「ええ・・・」

ヒカリ「あれ？紙がある・・・」

ー家にいますー

ヒカリ「うそ、休み？」

ココナ「いや、土日以外のAM10:00〜PM6:00までやってるって書いてあつたよ」

ヒカリ「あーもう・・・まあ行ってみよ」

ココナ「いいの？」

ヒカリ「いいんじゃない？」

五分後

ココナ「すいません、ジムやりたいんですけどー」

シーン

ココナ「返事がない、ただの屍のようだ。」

ヒカリ「ドア空いてるよ」

ココナ「入っちゃえ」

ヒカリ「ええ：： おじやましませーす」

ココナはドアを開けた。それと同時に歌が聞こえる

負けないなんて言わないよ

才能がないなんて言わないよ

だってそんなこと言ったらおしまいさ

笑っていくなら

そのうち強くなるさ

だから笑おうよ Oh そのままでいいから

ソブ「どうもソブです。えっと…どなたですか」

ソブは弾いていたウクレレを置き、話しかけた。

ココナ「今の歌って」

ソブ「ああ、僕が作詞して、キーボードのあいつが作曲してあの真ん中の人が歌ってるよ」

キーボードの人「あいつゆうな。腹パンするぞ」

ソブ「すいませんすいませんすいませ」

キーボード「嘘に決まってるでしょ」

ソブ「いやそう聞こえねえよ…」

ココナ「作詞ですか！」

ヒカリ「盛り上がってるとうろすいませんが話がだいぶそれってますな」

ココナ「ああ、そうだった。で何話に来たんだっけ」

ヒカリ「いやいやいや」

ヒカリ「ほらあれでしょ あれ… あれ… あれ… あれってなんだよ」

ココナ「いや知らねえよ」

ソブ「もしかしてジム戦？」

ココナ「そうそう！それだ！他人が覚えててどうするのさヒカリ」

ヒカリ「ココナにだけは言われたくない」

ソブ「まあまあ… んで、今からジムいく？」

ココナ「お願いします！」

ソブ「おk じゃまってるわ。トゲキツス空を飛ぶ！」

トゲキツス「ふゆうーん」ずばさっ

ガンツ！

ソブ「飛びすぎ… 天井にぶつかったし…」

ギター「かっこつけて家の中から飛ぶからだよ」

ボーカル「多分かっこつけてじゃなくっておおちゃくして」

ソブ「しっ… 失礼な！ ここが室内だって忘れてただけだよ！」

ボーカル「そうか、ならしやーな」

キーボード「くねーよ！ むしろそっちのほうがおかしいわ！」

十分ぐらい茶番が続いたため割愛

二十分後

ソブ「よし、んじゃあやりますか」

ココナ「そうですねー」

ココナ「ところで審判は？」

ソブ「あ」

ココナ「まさか忘れてたとか」

ソブ「いついよいよ！ ちよつとまってる」

ソブはケータイをとった。

ソブ「あーもしもしー、今審判できるー？ あーあんがとー じゃねー」

ココナ「？」

ソブ「来てくれるって」

ココナ「やっぱいなかったんじやないですか」

ソブ「違う違う。来るはずだったたけしが急に腹痛を訴えて」

ココナ「いや誰ですか」

ノノカ「参上！ ってあれ？ ヒカリさん！」

ヒカリ「ヴェエ！！」

ソブ「あら？ お友達？」

ノノカ「突然のお母さん口調」

ココナ「え？ どゆこと？」

ノノカ「アルバイトです！　なんかいきなり呼ばれて。審判わすれ」

ソブ「いやたけし！　たけし来る予定だったから！　忘れてないから！」

ココナ「動揺が顔に出てますよ」

ノノカ「まあ始めましょう。出せるポケモンはお互い三匹。どちらかのポケモンが戦闘不能になったら負けです。では勝負開始！」

ココナ「いっつておいで、カビゴン！」

カビゴン「ぐおー」

ソブ「行け、ジバコイル！」

ソブ「ジバコイル、影分身！」

ココナ「振り払って！」

ソブ「まだまだ影分身！」

ココナ「なっ：：　メガトンパンチ！」

ソブ「気にせずもつと！」

ココナ（これじゃあ永遠に当たらない：：　地面技はないし：：　あつ、地面か！）

ココナ「カビゴン、天井に向かってメガトンパンチ!!」

カビゴン「ぐおっ」ドンッ

カビゴンの右腕が天井に刺さった。

ソブ「？」

ココナ「全体重をかけて下に着地！」

カビゴン「ぐおー」ドンッ

ソブ「どこを狙って…」

!？」

カビゴンが着地した振動で地面が大きく揺れた。

ジバコイルの分身がすべて消えた。

ソブ「なるほど、地面を利用したんだ」

ココナ「地面技がなければつくればいい！つてことです」

ソブ「やるねえ…でも甘い。」

ココナ「何がですか？あとは本物のジバコイルにとどめを刺すだけ… いない！」

ソブ「ラスターカノン！」

ジバコイル「ぼじじじ」ドーン

ダイヤを溶かしてホースから勢いよく飛び出したかのような輝く光線はカビゴンめがけて貫いた。

カビゴン「ぐびや…」

ノノカ「カビゴン戦闘不能！」

ココナ「え…？」

ソブ「本物は電磁浮遊で上に隠れさせてたんだよ。アイコンタクトで。」

ココナ「まっ…… まあまだ一匹…… カビゴン、休んで。行ってきて！ヒコザル」

ココナ「ひのこ！」

ソブ「ジバコイル、十万ボルト！」

ジバコイル「じばばばば」 チュドーン

ヒコザル「うきやあ……」

ノノカ「ヒコザル、戦闘不能！」

ココナ「嘘でしょ……」

ソブ「あと一匹出す？」

ココナ「くー、行つてきて……」

くー「くるうーん！ …… くるう？」

ココナ「ううん、なんでもない。」

ソブ「ジバコイル、交代！ いけ、エレキブル」

ココナ「くー、ワイルドボルト！」

ソブ「受け止めろ！」

くー「くるうーん！」

ワイルドボルトが炸裂した。しかし効いていない。

エレキブル「ぶるるるるる」

ココナ「え、なんで」

ソブ「電気エンジン。素早さをあげてくれてありがとう。」

ココナ「くー、氷のキバ」

ソブ「よけてかわら割り！」

エレキブル「ぶるっ、ぶるるるる！」

電気エンジンが発動したエレキブルのスピードは少し速くなっている。

ソブ「いまだ、地震！」

エレキブル「ぐおおおおお」グラグラグラウラ

地震が決まった。効果は抜群だ。

くー「くるうーん……」

ココナ「くー!?!」

ソブ「ふう…… ありがとう、いいバトルだった。じゃあの一」

ココナ「……」

第8話 才能

ヒカリ「相手強かったししゃーないよー」

ココナ「。。。」

ヒカリ「調べたらコトブキジムって新人は7〜8番目に挑戦しないと歯が立たないらしいし」

ココナ「。。。」

ヒカリ「ココナだって十分強かったし」

ココナ「強く。。。ないよ。。。」

ヒカリ「だってあの戦い方はすご」

ココナ「全然すごくないよ！　だって3タテだよ！　あんなに工夫して全力で戦ったのに。。。　全く歯が立たないなんて。。。　強いわけないじゃん！」

ヒカリ「でも」

ココナ「ヒカリは才能があるもん。だから私のことなんて。。。　わかるわけないじゃん！」

ヒカリ「。。。」

ココナ「…ごめん」

ヒカリ「…。」

ココナ「ゴメン、ちよつと一人になりたい。」

ココナはどこかへ走っていった。

ヒカリ「ちよつと待って…！」

ヒカリ「ココナ…。」

202番道路

「レーダーが反応してるぞ」

「おいおい、反応レベルがマックスの30だぞ。こりや相当な獲物があつちにいる

ぜ」

「まじかよ。あつちはコトブキか…。」

「どうするよ?」

「もちろん捕獲だ。場合によってはあの輝く都市を真っ暗にしてやるぜ」

「そうだな」

「さすがシンオウ。イツシユから来たたわざわざ来たかいたがあつたぜ…。ん?誰か

が」

ノノカ「誰ですかあなたたち」

「うわっ！ びっくりしたガキかよ」

「んだチビ。俺たちは今忙しいんだ。」

ノノカ「誰がチビですか!! コノヤロー！」ガンッ

ノノカは相手の股間を蹴った。

「うっ…」

▼急所に当たった。効果は抜群だ。

「おいしっかりしろダイロ！」

「返事がない、ただの屍のようだ」

「てめえ… ダイロのダイロになんてことを！」

「ハーバ、やっちまおうぜ」

ハーバ「オーケー、ジェイソン。ダイロの＜自主規制＞の敵だ！」

ダイロ「まで、俺が行く。俺の＜自主規制＞の恨みは自分で晴らす！」

ジェンソン「復活はやっ」

ノノカ「黙ってたらごちゃごちゃと… 私にチビと言った罪は重いですよ！」

ジェイソン「＜自主規制＞を蹴るほうが重罪だろ！」

ノノカ「それぐらいいいじゃないですか！＜自主規制＞ぐらい」

ハーバ「お前…… 男の痛みを知らないで……！」

ダイロ「クリムガン、やっちまえ！」

ノノカ「行け、リオル！」

ダイロ「おうおう、珍しいポケモンじゃねえか、これは高く売れるぞ」

ダイロ「クリムガン、ドラゴンクロー！」

クリムガン「くりゅー！」ガリッ

リオル「くおん……！」バタッ

ノノカ「リオル!!」

ジエイソン「おらあ！」

ジエイソンはネットを投げつけた。

ハーバ「ナイスだジエイソン。持って帰って売りさばくぞ。」

ノノカ「ちよつと！リオルを離して！」

ダイロ「うるせえ！ クリムガン、チビにきりさくだ！」

クリムガン「ぐろう！」

ノノカ「!!」

ザクッ

ノノカ「ああ、私は天国でお花さんや蝶々たちと戯れながら日向ぼっこを……」

ヒカリ「しないわよ！」

ノノカ「ああ、神様だ…… 神様が…… 神様、私天国に行けますか」

ヒカリ「だれが神様よ！」

ノノカ「えっ?! ヒカリさん?! 私…… 生きてる?!」

目の前には瀕死になったクリムガンと優雅に飛ぶムクホークの姿があった。

ヒカリ「悪いけどチャンピオン様が来たからにはもう逃げられないわよ、ポケモンハンターさん。」

ダイロ「てめえ! こうなったら……」

ジエイソン「おい、それはやめろ！」

ダイロ「うるせえ！」ドンッ

ダイロは麻酔銃をヒカリに打った。

ヒカリ「うっ…… バタッ

ノノカ「ヒカリさん?!」

ダイロ「麻酔銃だ。死にはせん。だが今から八分の七殺しぐらいにしてやる」

ノノカ「それもほとんど死んでんじゃん！」

ダイロ「おめえも倒れとけ! おらあ!」ドンッ

ノノカ「これが…… 麻酔銃……」バタッ

ジエイソン「やっちゃったからには記憶失うぐらい殴ってやるしかねえなww」

一方ココナは

ジョーイ「元気になりましたよ。では頑張ってください。」

ココナ「ありがとうございます」

ココナは外へ出て、自動販売機で買った缶コーヒーを開けた。

ココナ「やっぱ向いてないのかな…　ヒカリに酷いこと言っちゃったし探しに行こ

う…　あれ？なんか変な人がいる…　あれ?!ヒカリが!」

ココナは走って人影が見えた方へ向かった。

ダイロ「ムーランド、かみつけ!」

ジエイソン「レパルダス、シャドーボール!」

ハーバ「ピジョン、つつく」

ヒカリ「ぐはっ…　痛い…　でも動けない…」

ココナ「ヒカリ!　これはどういうこと!」

ヒカリ「ココナ…　かっこつけて登場したら麻醉銃でうたれちゃった…　ははは

はは

ココナ「笑ってる場合じゃないよ…」

ソブ「電気エンジン。素早さをあげてくれてありがとう。」

ココナ「クー、氷のキバ」

ソブ「よけてかわら割り！」

エレキブル「ぶるっ、ぶるるるる！」

電気エンジンが発動したエレキブルのスピードは少し速くなっている。

ソブ「いまだ、地震！」

エレキブル「ぐおおおおお」グラグラグラウラ

地震が決まった。効果は抜群だ。

クー「くるうーん……」

ココナ「クー!?!」

ココナ「私…… 私……」

ジェイソン「おいおいどうしたww びびってやがるww」

ハーバ「どうせお前には才能がないんだ。そのポケモンを渡しておとなしく逃げちま

え。」

ココナ「才能が… ない…」

ハーバ「そうだ、才能がない。」

ココナ（才能…）

そのとき、ココナの脳内である曲が再生された。

負けないなんて言わないよ

才能がないなんて言わないよ

だってそんなこと言ったらおしまいさ

笑っていくなら

そのうち強くなるさ

だから笑おうよ Oh そのままでいいから

ココナ「才能… か。 くだらない。」ニヤッ

ジェイソン「ああん？ レパルダスやっちまえ！」

ココナ「行くよくー!」

くー「…!? ……くるうーん!」

くーは満面の笑みで鳴いた。ココナにはその声が「わかったよ!」と聞こえた。

ココナ「飛べ!」

くー「くー!」

ジェyson「何をして」

ハーバ「ww」

くーは大量の電気を放電しながら空へ飛んだ。それがいつの間にか電流ではなくヒカリになっていた。

ダイロ「この光は…!?」

くーはレントラーに進化した。

ココナ「いっけえ! ワイルドボルト!」ズドーン!

レパルダスは倒れた。

ダイロ「才能がないくせに」

ココナ「才能? そんな言葉知らないわ。だよね?」

くー「ぐるうーん!」

くーは更に光を浴びた。その光は稲妻へとかわる。

ダイロ「なんだこれは……」

くーは雷をまとう。その雷がだんだん翼の形になった。

行くよ！

ハーバ「ムーランドかみつく」

くーはよけた。その時のくーはまるでココナが脳内で操っているかのようだ。

くー「ぐるうーん！」

くーの電流があたりをピカツとまき散る。麻醉銃もムーランドも戦闘不能に。

ココナ「三人にワイルドボルト！」

くー「ぐるうー！」

バタツ

三人は倒れた。それと同時にくーをまとっていた電気は消えた。

ココナ「ふう……」フラツ

ヒカリ「すごい……」

ココナ「ヒカリ…… ごめんね」

ヒカリ「大丈夫！ それよりよかった。」

ココナ 「何が？」
ヒカリ 「なんでもない」

第9話 草むらへ飛び出そう！

ノノカ「昨日のあれなにをやったんですか？！ねえ、ねえ！」

ココナ「だからわかんないって…　なんかガーってなってミュンツてなったら」

ヒカリ「わかんないよ！」

ココナ「いやだからさあ、わかんない？」

ヒカリ「うん」　ノノカ「はい」

ココナ「息びったりだなおい」

ノノカ「じゃあ私はソノオに向かいますので。」

ヒカリ「じゃあねー」

ヒカリ「でもびつくりしたよ。翼みたいなのがザバツつてなって」

ココナ「あんま覚えてないんだよね…　ただ集中力が半端なかった」

ヒカリ「どんぐらい」

ココナ「桜Trickの最終回みてるときぐらい」

ヒカリ「いやわかんないよ」

ココナ「ええ…」

ヒカリ「でもよかった。自信取り戻してくれたし」

ココナ「ある日から『意気揚々としてたら大丈夫』ってわかったんだけど、思い出したよ。」

ヒカリ「ある日?」

ココナ「うん、あれは七歳の頃だったっけ…」

私は草むらに出ようとしてたんだよね。

ミヅキ「でも…」

ココナ「大丈夫、大丈夫。ちよつとだけでしょ」

ミヅキ「言う幼馴染と218番道路に出たんだ。ポケモンが飛び出してくるから行くなつて言われたけど、どうしてもミオシテイに行つてみたくて。」

ミヅキ「うわあ!」

ジグザグマが襲つてきたの。しかも大きい。

ココナ「ミツキ!? 大丈夫!?」

ミツキ「大丈夫だけど… 足が…」

ココナ「今手当てする」

私は手当てをしようとしたの。でもジグザグマが襲ってきて…

ココナ「ジグザグマ! ちよつとあちいってて」

ジグザグマは聞いてくれなかった。凶暴な子だったみたい。

ジグザグマ「ふゆるうー!」

ジグザグマが体当たりしてきたの。でもその時…

コリンク「くるうーん!」

ジグザグマ「ふゆるうう?」

コリンク「くるうーん!くるうーん!」

野生のコリンクが助けてくれたの。でも…

ジグザグマ「ふゆるうう!」ガンツ

コリンク「くるう…」

コリンクはレベルが低かったみたいで歯が立たなかった。でも、

ココナ「コリンク、ちよつときて。私に作戦があるの!」

コリンク「くるう?」

ココナ「ジグザグマはノーマルタイプ。だから格闘タイプや鋼タイプが怖いはずなの。だからこの鉄の棒を持って影分身で上から体当たり…。できる?」

コリンク「くるうーん!」

ジグザグマ「ふゆるう」

コリンク「くるうーりーりー」

コリンクはジャンプして鉄の棒をくわえた。鉄は日光を反射してて、ジグザグマは案の定おびえてた。

ココナ「今だ! たいあたり!」

コリンク「くるうーん!」ドガッ

ジグザグマ「ふゆりゆう…。」バタッ

ココナ「やった! 倒した! 倒したよミツキ…。 ミツキ?」

ミツキの足の痣は真っ青に悪化していた。

ミツキ「ごめん…。 足手まといになって…。」

ココナ「ごめんって…。 こっちのセリフだよ…。 私のせいで…。 大丈夫!?!」

ナカノ「どうした? 大丈夫か?」

ココナ「ミツキが…。 ミツキの足が…。」

ナカノ「フリーデン。」

フリーデイン「ふう。」

ナカノ「……なるほど、そういうことか。フリーデイン、あの子を念力で運んであげなさい。」

フリーデイン「ふうう」ミヨーン

ナカノ「さて、ココナ。」

ココナ「どうして私の名前を」

ナカノ「フリーデインのサイコパワーでさっきの出来事を見させてもらったからだ。」

ココナ「すごい」

ナカノ「まず最初に叱っておこう。草むらに子供だけででるんじゃない。」

ココナ「ごめんなさい……私のせいで……」

ナカノ「心配するな。彼女は大丈夫だ。そしてほめたたえるべきことがある。」

ココナ「えっ……？」

ナカノ「普通の子なら逃げることも助けを呼ぶことも……もちろん戦うことなどできなかつただろう。だが君は戦った。しかもとっさの判断にもかかわらず最善の戦略で。」

ココナ「照れます。」

ナカノ「私の学校に来ないか？10歳まで通えばかなり強くなるだろう。君ならりー

グもめぎせる。」

ココナ「えっ」

ナカノ「私はコトブキトレナーズスクールの塾長だ。」

ココナ「まじですか」

ナカノ「まあ考えておいてくれ。」

そして私は通うことになった。ミツキも入り、

私はさっきのコリンクを捕まえて、みるみる強くなっていた。

そして10歳になって、卒業まであと一か月を切ったころ、毎年恒例のコトブキジュニアカップが開催された。だけど…

ココナ「引っ越し!?!」

ミツキ「ごめん…」

ココナ「あやまるところじゃないよ」

ミツキ「すぐ暑くて遠いところに行くみたいで」

ミツキ「だからk j c (コトブキジュニアカップの通称。)は絶対決勝まで行きたい。」

ココナ「わかった。一緒にがんばろう!」

私たちはとにかく練習した。そして開催の日がやってきた。でも…

私たちは初戦で当たってしまった。

審判「ナエトル戦闘不能。よって勝者ココナ選手！」

ココナ母「やったわね！ココナ！」

私はミツキに勝った。でもうれしくなんてなかった。

だってあんなに練習して…… がんばって……なのに初戦で当たって勝ってしま

うなんて…… 嬉しいわけない。

私は決勝進出が決まった。その帰り母に「うれしい」と言われたときは泣きながら一人で走って帰ってしまった。

そして決勝の日。

ココナ「私…… 昨日勝っちゃって……」

ミツキ「大丈夫だよ、心配しないで。でも、勝ってね…… 私の分も。」

ココナ「うん……！」

そして決勝に向かった。相手はスクールで一番強いって言われてた子だった。名前は忘れちゃったけど、青髪の子だったと思う。

青髪の少女「いけ、ムツクル！」

ココナ「くー、お願い！」

私は負けた。

ミツキになんて言えばいいかわからなかった。負けちゃったから。

二週間ミツキに話しかけられなかった。

そして、引越しまであと二日になった。

私は行動に出た。

ココナ「ミツキ、来て。」

ミツキ「どうしたのヒカリちゃん」

ココナ「いいから。」

私が向かったのは青髪の少女の家だった。そう、私が負けた。

青髪「どうしたの?」

ココナ「今からバトルしよう!私、負けないから!」

青髪「いいけど…」

私はどうしても見せなかった。いや、見せなきゃいけなかった。青髪の少女に勝つと

ころを。

そしてバトルの終盤。

青髪「君のコリンクだ、いぶ疲れてきてるよ！」

ココナ「大丈夫！」

くー「くるうーん！」

青髪（このコリンク… 疲れ果ててるのに目だけは生き生きしてる…）

ココナ「くー！影分身をして空へジャンプ！」

くー「くるうー」

青髪「目くらまし？」

ココナ「違う！くー、氷のキバをしながら急降下でワイルドボルト！」

くー「くるうー…ん！」 チュドローン

ムツクル「むくう…！！」

青髪「ムツクル！！」

私は勝った。この勝ちは今までで一番すがすがしかった。

ココナ「ほら、自信を持って動けばできないことなんてないじゃん！」

ココナ「だからミツキ、人生意気揚々としてたら… なんとかなるよ！」

ミツキ「なんとか… なる…！」

ココナ「そう、だからミツキ。私とバトルしよう！」

ミツキ「えっ」

ココナ「自信を持ったミツキなら勝てる! あの子に勝った私に勝ったらあの子より強いってことになるじゃん!」

ミツキ「うん:. . . でも、手加減しないでね!」

ココナ「あつたりまえだよ!」

そしてバトルはくーとマリルの相打ちで引き分けになった。

ココナ「決着:. . . つかなかったね:. . .」

ミツキ「でも:. . . すつきりした」

ココナ「えっ?」

ミツキ「実は私、ちよつぱり嫉妬してた。強いココナちゃんに。それで一緒に練習したのにその相手に負けて:. . . 悔しくないわけないよ」

ココナにはミツキの瞳から光る液体が零れ落ちそうになっていることがわかった。

ミツキ「でもわかった。明るい自分でいればなんとかなるよね! ありがとうココナ!」

ココナ「ミツキ:. . .」

ミツキ「私、あつち行ってもミツキでいるから、だからいつか決着つけよ!」

ココナ「うん:. . . !」

その時、私の心の中にあつた黒い絵の具に黒い絵の具を塗り重ねたような感情が消え

た。

ココナ「いつか会ったら絶対に戦うんだ！ いい話でしょー」

ヒカリ「うん。そんなことがあったんだ！」

ココナ「えへへ」

ヒカリ（言えない：： その青髪の子が多分私だなんて言えない：：）

ココナ「どうしたの？」

ヒカリ「えっ!! いやいやなんでもないよ！」

そして私たちは、草むらへ飛び出した！

第10話 渡れストーカー!マイ登場!!

ノノカ「完璧なはず。」

ノノカ(道筋も地図を見ながら歩いてる。だから迷うわけなんてない。だからこのまま進めばきつと大丈夫…)。

ノノカがふと前を見ると、そこには大きな池があった。

ノノカ(こんな池あったっけ…。 まあいいや)

ノノカは避けて通ろうとしたが巨大な崖があった。

ノノカ(こんな崖あったっけ)

反対側を見ると滝が上から流れていた。

ノノカ(こんな滝あったっけ)

ノノカ「いやねえよ! なにここどこ? ママァー! パパァー! ポチィー!」

ノノカ「くそう! ソノオに面白そうなポケモンがいっぱいいると聞いて三年ぶりに行ってストーカー…。 観察しようと思ったのに道を間違えるとは! この地図どう

なってるの!」

ノノカは池を見てみた。すると小さな船を見つけた。

ノノカ（船だ船がある！しかも誰かが乗ってるよ！　そうだ乗せてってもらおう！）
ノノカ（だが問題点がある。船乗りにどう話しかけるかだ。
集団だったらノリで連れてってもらおう。

ノノカ「この船なまらイカしてるねえ！」

船乗りA「いい目してんなじよーちゃん！」

船乗りB「一回乗ってみつか？」

ノノカ「そうこなくっちゃ！　行けのソノオに近いとこまで行ってくれね？」

船乗りA「おーけーおけー！」

ノノカ「やったあ！」

ああ、でもよく見たら一人だ。

じゃあ一緒に乗りたい気分させるか。

ノノカ「うーみいーのお！　こーえーがあーききいーたあーくてえ！」

船乗り「きいみいのお　こええを　さがああ　しいいてるううう」

ノノカ「いいノリですね！」

船乗り「そっちこそ! 一緒に乗ってく?」

ノノカ「いきましょー!」

でもよく見たらおとなしそうな人だ。それならギャグで行こうかな。

ノノカ「この船でこの『池』を渡って『いけ』るか?」

船乗り「座布団一枚! ついでに乗ってけ!」

ノノカ「おっしや!」

さすがに寒いな。うん。

それならば壁ドンで…

ノノカ「おい船乗り」ドンッ

船乗り「はっ… はいつ…?!」

ノノカ「私と一緒に池の向こうにレッツパーティーナウ」

船乗り「はい…! 喜んで…!」

ノノカ「池を越えたら… 結婚しよう!」

船乗り「はいっ……！」

ノノカ「ヨソロー！」

これだ！

これしかないな。うん。よし行こう！

ノノカ「たのもおー！」

船乗り「なによ……？」

ノノカ「乗せてつてくれないですか？」

船乗り「なんで私がそんなことしなくちやいけないのよ」

ドンツ

ノノカ「そんなこと言つて ホントは誰かと船デートしたいなあとか…… 思つてたんだろ？」キリッ

船乗り「……っ!?!? / / / /」

ノノカ（えっ……）

船乗り「まっ…… まさかそんな訳ないでしょ！ / / / /」

ノノカ（この人……）

船乗り「だいたい私は好きな女の子と船乗りデートしたいなんて思うなんてことはっ：：／／／」

ノノカ（まさか：：）

船乗り「：： って！それじゃあ私がるでれずみたいじゃない！ ちっ：： 違うからねっ！私は決してそんな趣味は：：／／／」

ノノカ（凶星だああああああああああああああああああああああああああ）

ノノカ（ふざけてやってみたらまさかズボシになるとは：：）

しかも相手は相当なツ

ンデレ系 ビビりました。でも：：）

ノノカ「これが巷で噂のツンデレですか!？」

船乗り「えっ：：」

ノノカ「ツンデレさんって本当にいたんだ！名前は？」

マイ「マイ：：。 っていうかどこがツンデレよっ：：」

ノノカ「その口調がです！」

マイ「ゴホン！ なにさ：： いきなり：：」

ノノカ「いや今更クールキャラに戻っても無駄ですよ。」

マイ「とっ：： とにかく：： 船には乗せないから」

ノノカ「じゃあバトル！ バトルで私が勝ったら連れてってください！ まけた

ら：．． なんでもします！」

マイ「なんでそんなことしなくちや」

ノノカ「ねえねえお願いしますよー！」ジタバタ

マイ「わかった、わかったから！もうやめて」

ノノカ「そうこなくつちや！　じゃあ行きますよ。いけつ、リオル！」

マイ「全く：．．　出てきて、クロバット」

ノノカ「リオル、はっけい！」

リオル「くおん！」

マイ「かわしてアクロバット」

クロバット「くろお！」

クロバットは攻撃をかわしアクロバットをうった。効果は抜群。

リオル「くおん：．．」

ノノカ「リオル!？」

マイ「私の勝ち。」

ノノカ「そんなあ：．．　そうですよね：．．　さよなら：．．」シユン

マイ（このままじゃ行つちやう：．．　あつ！）

マイ「でもあなたのリオルが傷ついている：．．　ポケモンセンターに行くために特別に

船にのせてあげるわ……」

ノノカ「えっ!!」

マイ「さつきと乗りなさい! その……

これはあなたじゃなくてリオルのためだか

ら……勘違いしないように……」

ノノカ「ありがとうございます!」

マイ(私……何やってんだか……)

第11話　ココナ達、逮捕される。

ノノカ（無事にヒッチハイク成功：　いや、船ってヒッチハイクっていうのか？　そもそもヒッチハイクってどういう意味なんだろう：　まあいいや。　つか）

ノノカ（なんでこの人ついてきてるんだろ：　ストーカー？　私ストッキングされてる？）

ストーカーとか最悪じゃないですか。）

お前が言うな。

マイ「別にストッキングなんかしてないわ：：　　たまたま道が同じなだけ。」

ノノカ（心読まれた）

ヒカリ「この前の変な子だ！」

お前が言うな。

ノノカ「誰が変な子ですか。ていうかココナさんはどうして：：」

ヒカリ「大変なの！　すごい大変なの！！」

ノノカ「どうしたんだ」

ヒカリ「草むらが逮捕でいきなりココナされたの！　もうどうしよう！」

ノノカ「何を言いたいのかさっぱりですがとにかく大変なのはわかりました。」

五分後

ノノカ「落ち着きました？」

ヒカリ「うん……」

マイ「……なにかあったのよ」

ヒカリ「実は……ココナが草むらでいきなり逮捕されちゃったの」

ノノカ「え」

1時間前

ヒカリ「いい天気だねえ……」

ココナ「こんな日は家でゴロゴロしてたいね」

ヒカリ「雨でもくもりでもそういうでしょ」

ココナ「なぜばれたし」

ヒカリ「ココナと話したらそうとうな天然ボケじゃなかったら五分でばれるわ。」

ココナ「そうとうな天然ボケが目の前にいるんだが。」

ヒカリ「なぜばれたし」

ココナ「出ましたブーメラン発言」

???「ちよつと待ちなさい！」

ココナ「なんですか」

ジュンサー「ジュンサーです。逮捕状が出ているので署までご同行願います。」

ココナ「あ、わかりました。署ですね…。ちよつとまっけてくださ…」

ココナ「…つて今なんて」

ジュンサー「署です。あなたを逮捕します。」

ココナ「あはははは冗談きついですよwwww 隠しカメラはどこにあるんですかww

W

ジュンサー「動くな！撃ちますよ！」

ココナ「あははははははははは… はははは…」

ヒカリ「つて感じで捕まっちゃった」テヘ

ノノカ（テヘじゃねえよ）

ノノカ「何したんですか？」

ヒカリ「いや、事情を聴かされる間もなく連れてかれて」

???「そのチビ！」

ノノカ「誰だ今チビつつたの」

ジュンサー1「ジュンサーだ！ストーカー行為をしたとのことでお前に逮捕状が出ている！だから逮捕する」

ノノカ「…は？」

ノノカ「ちよつと待って！ 私なんもしてないです！ みんなもなんか言ってやってください！」

ヒカリ「まあ仕方ないわね。」

マイ「いつかこうなると思ってたわ。」

ノノカ「つておいしいいい」

ジュンサー1「ほら行くぞ」

ヒカリ「どうする？」

ノノカ「私に言われても…」

ヒカリ「あれ？またジュンサーさんが」

ジュンサー2「あなたがマイさんですね」

マイ「…はい」

ジュンサー2「ツンデレ罪で逮捕します」

マイ「（（ツンデレ罪ってなにイイイイイイ!!?）（（（

ヒカリ「えっ… ちょ… あっ、また違う人が」

ジュンサー3「ヒカリさんですか？」

ヒカリ（嫌な予感が）

ジュンサー3「なんか逮捕します」

ヒカリ「（（私だけ適当だああああ）（（（

取調室

警察「やったんだろ？なあ？」

ココナ「あの… やったってなにを」

警察「とぼけるんじゃない！ こんなことして…
ぞ！」

ココナ「いや実家コトブキですし」

警察「俺の母さんだよ！」

ココナ「お前のお母さんかよ！」

ホウエンのお母さんも泣いてる

警察「警察にお前とか言うな！用務妨害罪で再逮捕する！」

ココナ「それで執行されんの?! まず私なにしたし」

警察「あの… あれだ… 落ちてたパン食ったろ」

ココナ「食ってないしそれ犯罪なの?!」

警察「あれだ、残飯不純飲食罪だ！」

ココナ「いや絶対今作ったろ！」

警察「警察を疑うのか！俺侮辱罪だ！」

ココナ「なにその田舎の不良が言ってるような罪名?! ないでしょ！」

警察「あるわけないだろ！何言ってるやがる！」

ココナ「っておい」

警察「とりあえずポケモンを没収する！ 抵抗されたら困るからな！」

ココナ「あ、ちよ…」

ココナ（どうなってるのこれ…）

n
t
i
n
u
e

T
o
b
e
c
o

第12話 波乱の刑務所

ココナ「あの、ドツキリなら早く言ってもらえませんか？」

ココナは残飯不純飲食罪とかなんとかで自称警察から取り調べを受けていた。

警察「なにがドツキリだ。貴様、八つ裂きにするぞ？」

ココナ「警察が脅迫しちやったよ……」

警察「とりあえず牢屋に入れ！今連行してやる。」

ココナ「とりあえず牢屋ってなに?! そんな喫茶店でコーヒー頼むみたいなノリで牢屋入れていいの?!」

警察「いいから来い！」

その隣の部屋では

警察「……」

マイ「……」

警察「……」

マイ「……あの」

警察「…。」

マイ「ツンデレ罪ってなんですか」

警察「…。」

マイ「…あの なんか言ってください。」

警察「かつ丼食うか」

マイ「はええよ！ 普通それ最後でしょ！ 第一声がかつ丼ってどんなサスペンスド

ラマだよ！」

警察「TKGの方がよかったか？」

マイ「そこじゃないわよ！」

警察「じゃあ海鮮丼？」

マイ「食べたいな！ うん。普通に食べたいけどそこじゃない！」

警察「そんな予算ねえよ」

マイ「だろうね！」

警察「ポケモンは預かる。整理ができるまで牢屋に入っとけ」

マイ「ちよつと！」

そのまた隣では

ノノカ「私なにしたんですか」

警察「ストーキング。」

ノノカ「ちよつと待つてくd」

警察「ストーカー行為は親告罪で、罰則は6か月以下の懲役、または50万円以下の罰金である。また、警察は警告書による警告ができ、この警告に従わない場合、都道府県公安委員会が禁止命令を出すことができる。命令に従わない場合には1年以下の懲役または100万円の以下の罰金となる。また、告訴する以外に、被害者の申し出により警察が弁護士との紹介や防犯アラームの貸し出しなど、国家公安委員会規則に基づく援助を定める。女性だけでなく男性も保護対象であり加害者が同性でも適用される。

2012年11月に発生した逗子ストーカー殺人事件を受けて、2000年の本法成立以来初の改正案が2013年6月26日に衆議院で可決。(Wikipediaより引用。)

ノノカ「」

警察「こつちに来い。」

ノノカ「」

その向かいの部屋では

ヒカリ「いや私だけ絶対おかしいよね？」

警察「とうとう？」

ヒカリ「なんかってなんだよなんかって。おかしいでしょ。せめてなんか偽造しろよ

！」

ココナ……落ちてた食パンを拾い食いし逮捕。

ノノカ……ストーカー行為により逮捕。

マイ……ツンデレ罪で逮捕。

ヒカリ……なんか逮捕。

警察「逮捕は逮捕なんだよ。」

ヒカリ「わけがわからないよ」

警察「じゃあ逆にお前が何もしてないという証拠は？」

ヒカリ「私がしてないもの！」

警察「もし……知らないうちに何かをしていたら？」

ヒカリ「そんなことっ……」

警察「じゃあお前は呼吸しているときの感覚をすべて覚えているのか？」

ヒカリ「それは……」

警察「意識なんてほぼない……だろ？」

ヒカリ「まあ… はい。」

警察「それと同じように無意識で何かをしていたら…」

ヒカリ「でも…」

警察「そういうことなんだよ」

ヒカリ「私… 私…」

警察「涙拭けよ。お前になら償うことが可能だ。さあ、ポケモンを置き牢屋でその日
を待つんだ！」

ヒカリ「私に… できますか…」

警察「できるさ… 君なら… 雨雲がいつかは去り、虹が出るようになる！」

ヒカリ「…はい！」 ↑ 騙されやすい

五分後

警察1「こつちだ！」

ココナ「ちよつと待てて」

警察2「入れよ」

マイ「こんなの絶対おかしいわ！」

警察3「こつちだ」

ノノカ「」

警察4「待ってるぜ」

ヒカリ「はい…」

ガチャツ

ココナ「…つてみんな!？」

マイ「どういうことよこれ!」

ココナ「状況がつかめない」

マイ「それにあの二人…」

マイはノノカとヒカリに指を指した。

ノノカ「私捕まっちゃった… ははは… はははは…」

ヒカリ「はははははははは らいじょーぶらいじょーぶ はははははは」

ココナ「完全に廃人化してるね。うん。」

ココナ「ヒカリ! しっかりして!」

ヒカリ「私はいつか反省して外の世界へ」

ココナ「じゃなくて! 明らかにおかしいから! 騙されてるから!」

ヒカリ「騙された… はははははは … え!?! だまされた!?!」

ココナ「そうよ! 絶対そうでしょ!」

ヒカリ「そうよね！　なんか逮捕なんておかしいよね！　だましたなあいつ」↑情緒不安定

マイ「ちよつとノノカ！　なにあつさり洗脳されてんのよ！」

ノノカ「ストーカー行為は親告罪で、罰則は6か月以下の懲役、または50万円以下の罰金である。また、警察は警告書による警告ができ、この警告に従わな（以下略）だよ？　もう私シヤバの空気吸えない」

マイ「ここの警察は偽物よ！　私なんかツンデレ罪よ？」

ヒカリ「私なんかなんか逮捕よ」

自称警察「たしかに俺らは偽物だ。だがあつさりボールを渡したお前らがカスなただ。」

ココナ「お前ら…　何者ですか!!」

自称警察「満を持ってシンオウの入り口を支配しに来た…」

ロケット団員1「ロケット団だ！」

ココナ「なんだって！　ロケット団って…！」

ロケット団員2「ははははは！　驚いたか！」

ココナ「ロケット団って…！」

ココナ「なに？」

ロケット団 「…は？」

ヒカリ 「昔カントーと譲渡にいたドロボー集団よ！ 確か二回滅亡したはずなのに」

ロケット団員1 「自然の豊かなシンオウは俺たちにとつて都合がいいんだ！」

ロケット団員2 「まあ、俺たちだけじゃないがな」

ロケット団員3 「おい」

ロケット団員2 「おっと、おしやべりが過ぎたな」

ロケット団員4 「…。」

ココナ 「泥棒三人ぐらい私のレントラーで十分！ 出てきてくー… つてあれ？」

ココナ 「そういえば渡しちやったのか…」

ヒカリ 「ゴメン私も」

ノノカ 「私もです」

マイ 「悪かったわね取られて」

ロケット団員3 「全員から没収してやったぜ お前らに抵抗手段はない。」

ロケット団員1 「じゃあなww」

ロケット団員4 「…。」

マイ 「ちよっと！」

ヒカリ 「行っちゃった…」

??? 「すまない…」

ココナ「へ？」

署長「ここの署長だ… 私が弱いばかりに… 市民を守るところかこんなことに…
実に情けない…」

警察「僕は本物の警察だ… だが、何もできなかった僕はもう警察を名乗る資格はな
い… 本当にすまない…」

ジュンサー「私も弱いばかりに衣装を奪われ利用されてしまったわ…」

ココナ「あなたたちは悪くないです… それに…」

ココナ「なんか逮捕で騙されたヒカリの50倍はマシです。」

ヒカリ「ははは… ↑なんか逮捕で騙された人

マイ「で、どう脱出するかっていうのが問題なわけだけど」

ノノカ「金づる作戦」

マイ「却下」

ヒカリ「お色気作戦」 うっふーん

マイ「却下」

ココナ「百合展開作戦」

マイ「却下」

十分後

ヒカリ「で、最終的に残った作戦が『猫だまし作戦』『ウンコ漏れそうなんですけど作戦』『目潰し作戦』なわけだ。」

マイ「猫だましと目潰しはタイミングが最悪来ないかもしれないし、ウンコ漏れそう作戦は信じてもらえないでしょ」

ノノカ「じゃあ三つを一つの作戦に凝縮させてみますか」

ココナ「それいいね！ ウンコ漏れそうって呼んで、そこに来たロケット団を猫だまししたあと目潰しして鍵を奪う。なずけてウンコ騙し潰し作戦！」

マイ「ネーミングセンスどうにかしなさいよ」

ヒカリ「これで行こう！ じゃあその漏らしそうな演技すんの誰にする？」
一同「…。」

一分後

マイ「なんで私が…。」

ノノカ「しょうがないじゃないですか」

ココナ「ジャンケンで負けた人って決めたんだし、しゃーないよ。」グツ

マイ「忘れてるかもしれないけど私コミュ症でクーデレだったのよ」

ヒカリ「それが今ではツッコミ担当かつツンデレに」

マイ「なんでこんなことに」

ノノカ「早くしてくださいよ。」

マイ「わかったわよ……」

マイ「誰かぁ！ 誰か来てください！ あの… ブツが漏れそうなの！」

ココナ「ソ、ソレハタイヘンダー」

ヒカリ「誰か来てくれないとこの署臭くなっちゃうなー どうしようかなー」

ロケット団員2「それは本当か！ …… って騙されるかボケ！」

ヒカリ「猫だましッ」パチンッ

ロケット団員2「わっ」

ノノカ「目つぶしっ」グサッ

ロケット団員2「ぎゃああああああああ」

ココナ「今だ… 鍵を…」

ロケット団員1「おい、なにをやっている?!」

ロケット団員3「しっかりしろ！」

ヒカリ「来ちゃったよ」

ロケット団員1「よくやってくれたな。おかげさまでお前らをいたぶることにした。」

ココナ「それはどうも」

ロケット団員4「これはしばきあげるしかないな。」

ロケット団員3「そうだな。早くやっちまおうぜ。」

ロケット団員4「こいつらじゃない。」

ロケット団員1「え？」

ロケット団員4は1人の胸に右フック、もう一人の脇腹に回し蹴りを入れた。

ヒカリ「へ？」アゼン

ロケット団員1「お前… どういうことだ… 何者だ…」バタツ

ハンサム「よくぞ聞いてくれた。国際警察、コードネーム：ハンサムだ。」

n
t
i
n
u
e

T
o
b
e
c
o

第13話 シャボンを突破せよ!

ココナはただ唾然と彼がロケット団達を御用していく姿を見ていた。

ハンサム「大丈夫か?そこに君たちのモンスターボールがある。悪いが先に行くぞ。」

ココナ「あ… ありがとうございます…」

したつば5「おっと、そうはさせないぜ。」

したつば6「軽く10人20人という俺たちを突破して幹部様のとこまでいくつもりかい?」

ロケット団のしたつばと思われる黒い制服を着た男達が道をふさぎ、ポケモンを繰り出した。

ハンサム「クソ… これじゃあラチがあかん…」

ノノカ「おらあ!」ガンッ

ノノカの頭突きがハンサムの目の前にいる数名に衝撃を与え倒れさせた。

ノノカ「道は空きました。早くそのスカンプーとやらのとこに行ってください。」

ココナ「幹部な。」

ハンサム「だが…」

ココナ「ここは私たちに任せてください。」

マイ「こんな不良集団なんか四人で十分よ。」

ハンサム「しかし…。」

ヒカリ「チャンピオンだって一人いますから! ダイジョーブです!」

ココナ「えっどこ!?」キョロキョロ

ヒカリ「おいコラ」

ハンサム「ありがとう。必ず戻る!」

したっぱ5「おいま…。」

ノノカ「騙したこと忘れてないですよね…?」ギロツ

ヒカリ「洗脳してきたやつはどの子かなあ〜」ニコオツ

したっぱ達「」

ヒカリ「ココナあ… ちよつと戦場の死神にでもなつてみない…?」ニコツ

ココナ「しやーないね…。」

ココナは肩をすくめた。

ノノカ「リオル、グロウパンチ!」

ヒカリ「ムクホーク、ブレイブバード エンペルト、ハイドロポンプ!」

マイ「クロバット、アクロバット。」

ココナ「くー、氷のキバ！ ヒコザル、ニトロチャージ！ カビゴン、のしかかり！」
くーは氷のキバで何匹もの敵を薙ぎ払い、エンペルトのハイドロポンプとカビゴンの
のしかかりの振動でまわりのポケモンやしたつぱがひとつ、ふたつ、みつつと次々に飛
んでいく。リオルのグロウパンチはポケモンというよりしたつぱの股間に命中して
いる。つかどんだけ恨んでんだよ。その中を迸っているのがムクホーク。ポケモ
ンやしたつぱをブレイブバードとインフアイトのコンボでなぎ倒していく。

そしてあつという間にあたりは瀕死になったポケモンと股間を抑え口から泡を吹き
ながら倒れこんでいるしたつぱのみになった。

ココナ「こんぐらいかえ？」

ノノカ「ちよつと優しすぎたかな」

マイ（これ以上何があるんだよ。）

マイはそう思いながらもがき苦しむ彼らを見つめる。

ヒカリ「国際なんたらさんのとこに行くか！」

マイ「国際ならまだしも警察忘れてどうすんのよ」

ココナ「とりあえず行こうよ」

ココナ達は廊下を進んだ。するとある時戦闘音のようなものが聞こえた。

ハンサム「グレッグ、どくつきだ！」

??? 「クリームガン、ドラゴンクロオ！」

ヒカリ 「これはハンサムさんの声!？」

マイ 「急ぐわよ！」

??? 「行かせねえぜ？」 ドンツ

白服の男がいびつな形をした銃をうった。

その銃から出たものがシャボン玉状になりココナたちをひとりひとり別々に閉じ込めた。

ココナ 「なにこれ!？」

ヒカリ 「壊せばいいことでしょ。ムクホーク、インファイト！」

白服の男 「無駄だ。内側から壊すことはできない。膜は特殊な氷でできていて、外側は鉄を化学変化させたものだ。それと」

シャボンの膜からエネルギーが出てヒカリに命中した。

ヒカリ 「うっ… なにこれ…」

ココナ 「ヒカリ!？」

白服の男 「その膜は内側の攻撃と同じ威力と同じ長さでエネルギーを跳ね返す。インファイトとなるとその時間威力はそうとうだろうなあww」

ノノカ 「卑怯です！」

マイ「私たちを開放しなさい！」ドンツドンツ

白服の男「だからあ、その膜に攻撃しちやだめだつてwww」

マイ「わあっ!?!」

マイに小さなエネルギーが命中した。

ココナ「長らく説明どうもありがとうございました。」ニヤツ

白服の男「どうした？強がうちまつてww」

ココナ「笑つていられるのも今のうちだよ？　くー、透視で膜の隙間を探して。」

くー「くるうーん…　くるうーん！」

ココナ「あつたんだね。じゃあ全部の隙間に細い電流を通して外側から当てるんだ

！

白服の男「そんな威力じゃ壊せるわけないだろww」

ココナ「確かに壊すことはできない。でも温めることなら電撃で十分。」ニヤツ

白服の男「まさか…!?!」

電撃が与えた熱が鉄を通つて膜を温める。そして膜が解け始めた。

ココナ「外側は鉄でできてるんだよね？鉄は伝熱性だから電撃で温めたらすぐ内側に

行く。そして膜は氷だから…」

バシヤンツ

ココナ「膜はすぐに解ける。そして外側からの負荷だからエネルギーは出ない。」
白服の男「クソ！」

ココナ「膜が解けたらもう怖くない。くー、ワイルドボルト!カビゴン、体当たり!」
くー「ぐるうーーー!!」

カビゴン「ぐおおおおおおおおお」

ガドンツという音を立て膜のなくなったシャボン状の壁はいつきに崩れ落ちた。
ココナ「さてと、覚悟はできてる?」